

以前、自分の人生設計を考えていたとき、自分もいつか結婚して子どもを産んで育てるということを経験するのだろうか、とふと思った。親や少し年上の女性たちの多くは、それが当然と考えているようである。女性の脳は子育てに適している、とまでいわれたこともある。だから女性が子育てを担当するのだという。私は、将来子育てをするために生きてきたわけではない、男性だって子育てはできるし、するべきである、と反発心が芽生え、論文のテーマを「母性」にした。

「母性本能」とか「母性愛」といわれるものは幻想という考え方があるが、では本当は何であるのか。なぜここまで一般的な考え方になっているのか。「母性」への幻想は問題を生じさせてはいないか。そして、私と同世代の人間はどのように考えているのか。この論文は、これらの疑問の答えを探るための研究である。

第一章では、母性とは何かを先行研究をもとにまとめ、イデオロギーとしての母性の部分を取りだして、形成の背景やその問題点を考察した。

母性とは、もともとは「母である期間、母らしさ」といった、母親になった女性を対象に使用された、限定的な意味であった。しかし、戦後の日本で母子保健法の制定とともに、その対象が思春期から更年期の女性まで範囲が広がり、それにもなつて母性の意味も広がっていった。この時点で、医学的な意味だけでなく、社会的意味、価値観も付与されたことが先行研究によってわかった。

この母性イデオロギーが広く一般に受け入れられていった背景を、母性イデオロギーの形成過程をたどることで、明らかにした。母性イデオロギーは、「家」制度が行なわれていた時代の習慣から始まっているという。女性が子どもを産み育てなければ一人前とみなされなかった時代、「家」に嫁いだ女性は子どもを産まなければ立場が安定しなかった。戦後、この「家」制度が廃止されてからも、母性イデオロギーは根強く残り、やがて「我慢強い母」が賞賛されるようになる。産業構造が変化し、物質的に豊かになってくると、専業主婦が一般的になり、彼女たちが家庭での家事や育児に、愛情もって取り組むことが推奨された。

メディアもまた、この動きにあわせてメッセージを発信した。「我慢強い母」が偉大であるとされた時代には、「母もの」映画が数多く製作され、「愛情豊かな専業主婦の母」が推奨された時期には、「楽しい育児」をイメージさせるような歌が流行した。このような母性イデオロギーの特徴は、性別役割分業意識が強いこと、子ども中心主義であること、母子関係の距離感のなさ、の三点が特徴として挙げられる。

つぎに、この母性イデオロギーが現在どのような状況にあるのかを、育児休業の取得率や育児雑誌などのメディアの分析から考察している。育児休業は男女ともに取得できるにもかかわらず、多くの場合女性が取得している。現状において、母親が産んだら育てるという習慣は人々の間で一般的になっているといえる。育児雑誌も、この現状に合わせた形で、母親を対象に育児情報を提供していることがわかった。一方、テレビドラマでは、母親が育児をすることや、性別役割分業に対し、問題提起をする番組が制作されていて、夫は働き、妻は家事と育児を担当するという既存の概念に、一石を投じる動きをみせている。

第二章では、実施した調査の概要を示し、その結果を分析している。調査は、大学生の母性イデオロギーと性別役割分業観を明らかにするものであり、母性イデオロギーにどの程度とらわれ

ているかを知るためのものである。母性イデオロギーに関する質問項目、性別役割分業観に関する質問項目のほか、育った家庭環境を知るための項目、将来設計を尋ねる項目を設け、それぞれの関連性を分析した。その結果、母性イデオロギーは、予想していたほど強くはみられなかった。また、性別役割分業に対しても否定的な意見が多く、大学生らが既存の概念にそれほどとらわれていない傾向がみられた。

彼ら彼女らの成育環境の傾向は、母親が働いていなかった家庭と、母親が何らかの形で働いていた家庭とで、二通りに分かれた。しかし、育児を担当していたのはほとんどの家庭において母親であり、父母ともに同じくらい育児にかかわっていたという家庭は少なかった。しかし、大学生の多くが、将来は夫婦ともに働き、育児にも同じくらいかかわる分担をしたいと考えていることがわかった。また、理想の分担を決定付ける要因は、育った環境の影響だけではないようである。

さらに私は、成育環境や将来設計と、母性イデオロギーの関連に着眼し、成育環境が母性イデオロギーの形成に影響しているか、母性イデオロギーが将来設計に影響しているか、成育環境が将来設計に影響しているかなどについて考察した。成育環境については、誰が世話されていたかということと母性イデオロギーに関連がみられた。主に母親に世話されていた人のほうが、両親に育てられていた人よりも母性イデオロギーが強い傾向があった。また、母性イデオロギーと働き方には、若干の関連がみられた。母性イデオロギーが強い男性では、仕事を続け、配偶者には中断してほしいという人が多かった。ただし、女性に関しては、母性イデオロギーが強い女性はほとんどなく、働き方との関連もあまりみられなかった。成育環境と将来設計については、母親が働いていたかどうか、母性イデオロギーに影響を及ぼしていることがわかった。母親が働いている場合、男性も女性も「子どもをもつ女性が働き続けること」に対して積極的、あるいは協力的であることがわかった。一方、母親が働いていなかった人の場合は、男性でも女性でも、男は仕事・女は家事育児という考え方に賛成する傾向があった。

全体として、大学生の多くは母性イデオロギーにとらわれていないといえる。夫婦が対等となる家庭内の分担を理想とし、母親が働くことに対しても、強い抵抗は示さなかった。しかし、具体的な働き方や子育ての内容にふれると、従来の母性イデオロギー、性別役割分業観にとらわれているような傾向をみせる。これはモデルとなる前例がないためではないかと考えられるが、今回の調査では明らかにすることができなかった。